「様式の上であれ!」と村野藤吾は言った

新山ひろし

何だか不思議な円型の建物が建っている。建物というより、むしろ、童話の中のお堂のような・・・そんな気がする。これはいったい何のだろう。近づいてみると、三層になっている。一階は吹き抜け風、二階には紫のタイルのテラス、三階の壁面は、くすんだアズキ色のタイルでかわいい出窓がある。そして、最上部には舟型の天窓が飾られている。見れば見るほど、楽しくなってくる。これが、僕と関西大学博物館との最初の出会いだった。

博物館の名は簡文館

この関西大学博物館は、元々は昭和3年に開設された関西大学図書館の増築部分だった。増築されたのは昭和30年、今から55年前に当たる。その後、昭和60年に、図書館機能が他に移り、考古学資料などの研究所となったが、この時、「簡文館」と名付けられた。その後、平成6年に、今の関西大学博物館として学外にも広く利用されるようになった。そして、簡文館は、平成18年度の「登録有形文化財」の一つとして選定されたが、この増築部分の設計は、文化勲章を受けた建築家の村野藤吾によるものだという。博物館を訪ね、学芸員の山口卓也さんにお話と貴重な資料を提供していただいた。山口さんの話では、関西大学には、村野藤吾の手になる建造物が昭和24年から昭和55年までの30年間に、40もあるという。今は取り壊されたものもあるが、その数にまず驚いた。30年間に40件ということは、一年に一件以上の設計を引き受けたということになる。村野藤吾の思い入れもただならぬものだったのだろう。

簡文館の前の村野藤吾。増築の頃か…

村野藤吾という建築家の魅惑

ここで、稀有な建築家・村野藤吾のことを少し、紹介してみよう。村野藤吾は、明治24年、佐賀県唐津の生まれ、早稲田大学建築科を卒業後、渡辺節建築事務所に就職、建築家の人生をスタートさせ、生涯、大阪を拠点として建築家を全うした。

すぐ目に浮かぶ作品は、例えば、ラジオを大きくしたデザインの「そごう百貨店」、日本調を見事に取り入れた「新歌舞伎座」、螺旋階段がユニークな「喫茶プランタン」、細部に凝った「近鉄百貨店」、梅田地下道の吸排気という役割を越えて大阪のシンボルになったジュラルミン製「梅田吸排気塔」などが有名だ。僕は、この吸排気塔で村野藤吾のファンになった記憶がある。機能と統一感を重視するモダニズムが主流となりつつあった建築の世界で、村野は「様式の上であれ!」と自他に問いかけ、様式にとらわれない個性的な建築を世に送り続けた。一つ一つの建築に、村野ならではの独創的なアプローチを見せ、日本の昭和建築に大きな足跡を残した。その作品は、市庁舎、劇場、学校から喫茶店、日本建築に及び、「村野好み」としか言えない、独自な世界をつくり出している。

「この簡文館は、関西大学の中でも一番高い所にあるのです。

関西大学博物館。チャーミングな建物だ。木々の中にあることがとても似合っている

だから、昭和30年に円形部分が増築された時は、下から見上げてふんわりと空に浮かんでいるように見えたそうです。村野藤吾は、そこを計算に入れていたのですね」と山口学芸員は語る。提供していただいた関西大学紀要の中にあった、川道麟太郎氏の『関西大学における村野藤吾の建築とその後』という研究論文から、関西大学と村野藤吾の出会いを見てみることにしよう。

関西大学と村野藤吾の出会いから生まれた建築物

村野が、関西大学の設計をどのような思いで引き受けたのだろうか。村野は、まず「ブルトーザーを入れるのは最小限にしたい」と言ったという。そして、高低差の多かった関西大学の地で、土地の高低差を個性とし、そのまま生かしたデザインを施していった。そして、大学における建物はできるだけ低く、樹木を多く植えることが大切と村野は主張した。それが村野にとっての「学園」のイメージだった。今も関西大学には、大学によくある時計台がない。これも大学が権威や権力を表わすものではなく、自由と個性を尊重する場所という村野の考え方が生きている。村野藤吾と関西大学の出会いは、まさに、互いが互いを求めあった関係というべきだろう。

キャンパスに残る村野藤吾の魂

今日、関西大学に見た村野藤吾の大学に対する思いに、いささかの動揺と、大いなる喜びを感じた。脱帽である。人間はもっともっと自由で、もっともっと楽しく生きていけばいい。そんなメッセージを感じるのである。

考えてみれば、村野藤吾は、近代の日本の建築史の中で、まことに異彩を放っている。一切の権威をものともせず、古い様式と戦い、そして、ここが村野藤吾の急所なのだが、新しい建築のムーブメントだった「モダニズム」にも反発していたのである。多くの建築家がモダニズムを新たな様式としてなびこうとしていたその時に、村野は、悠々として、関西大学の学生の自由について思いめぐらしていたのである。「様式の上であれ!」この村野の叫びは、一見、新しく見える様式にもとらわれるな!という意味である。勇気ある言葉だ。

村野藤吾の嫌悪感を受け継ぎたい

ところで、このところ、村野藤吾設計の建築物が取り壊されるケースが増えている。心斎橋そごう本店、新歌舞伎座、近鉄劇場、近鉄百貨店阿倍野店など、名建築が次々に消えて行った。その後に、ただただ高層の画一的な都市的建築の威容が展開してゆくのだろうか。村野はニューヨークの摩天楼をひどく嫌っていたそうだ。その村野の「嫌悪感」という生理が、僕にはとても新鮮に感じられる。村野の生理を少しでも受け継いでみたいとも思う。

ちょっと頑固でユーモラス、僕の前に建つ簡文館が、村野藤吾そのものに思えてきた。(了)

「村野好み」のらせん階段。さりげなく博物館の中にある

■参考資料■

●『村野藤吾建築案内』村野藤吾研究会編　TOTO出版

●『関西大学における村野藤吾の建築とその後』川道麟太郎著　関西大学紀要

■協力■

●関西大学博物館

〈関西大学博物館へのアクセス〉

阪急電車「関大前」駅下車、徒歩10分／月～金曜日(大学の休日を除く)午前10時～午後4時

電話06-6368-1121

大阪府吹田市山手町3-3-35